昭和47年卒園芸学科古稀を祝う会

寒河江市在住
佐藤　孝宣
（昭和47年園芸学科卒代表幹事）

平成30年11月7日～8日に、昭和47年3月卒園芸学科古稀を祝う会を湯野浜温泉「愉海亭みやじま」で開催しました。

北は北海道、南は東京から11名の参加となりました。

部屋に集まるなり、ビールとワインが準備され、夕日が沈むのを眺めながらノドをうるおしました。

懇親会では、参加者全員から近況報告。ほとんどの人が現役で活躍中との話に、さすが団塊世代のパワーを感じました。

部屋での二次会では、鶴窓会から頂いた「みどり樹」に風が流れるように、あの頃のように飲まないか」の純米吟醸「みどり樹」を飲みながら50年前の思い出話で盛り上がりました。

次回は三年後、それまでお互い健康で、また、湯野浜温泉にての再会を確認して散会しました。

（平成30年11月7日-8日 於：鶴岡市「愉海亭みやじま」）

旧地域生態学（森林生態学）研究室有志同窓会を開催致しました！

新井　大輔
（平成18年生物環境学科卒）

平成30年9月15日（土）に旧地域生態学研究室OB・OGの有志が集まり、鶴岡市の農学部に程近い「滝太郎」にて、研究室同窓会を開催致しました。今回が初めての開催となりましたが、山形県内在住の方のみならず、新潟や福島、東京や長野から、果ては福岡からこの会のために総勢15名の有志が集まり、思い出話に花を咲かせました。集まった同窓生は、平成17年度から平成28年度卒業までと幅広い世代が集まり、当然、多くの人が初対面同士でしたが、在学中の研究の話や、研究室の今昔話など、同窓生ならではの話題で盛り上がり、懐かしさと新鮮さが交わる、非常に楽しい時間を過ごしました。また、卒業後の進路も多岐に渡っていながらも、同じ業種であったり、関わりのある業界だったりと、仕事内容の話でも盛り上がりました。なかには、林業業界に携わる者同士で、林業用ヘルメットのメーカーが一緒だと盛り上がり、かたや農協職員と農薬メーカー職員の二人は、農薬について熱く語り合うなど、それぞれ世代も住んでいる場所も違うけれども、同じ研究室で育ったのだと強く実感する会となりました。

今回の同窓会は、実は当初、学生実習での思い出の地である「上名川演習林」で行なうことを予定しておりました。しかしながら、今年8月に山形県を中心に発生した豪雨災害により、演習林管理棟に続く唯一の橋である尺平橋の護岸が崩壊し、橋の通行が出来なくなり、急遽会場を変更しての開催となりました。楽しみにされていた同窓生の皆様には本当に申し訳なく、主催幹事としてこの場をお借りしてお詫び申し上げます。現在、この尺平橋は復旧に向けて工事が進められており、早ければ今年の雪が降る前には、仮設の橋が設置される予定でおります。ですので、これに懲りずにまた演習林に遊びに来て頂き、願わくは、この研究室卒業生の多くが苦楽を共にした、谷地幅ブナ林固定調査地を共に訪れたいものです。そして何なら、輪尺を振りかざし、あの頃のように激しく調査を行い、過去のデータと繋ぎ合わせて、空から小山先生にダメ出しをしてもらい、同窓生皆で研究室の歴史を感じたいものです。そしてまた、酒を酌み交わしたいものです。

今回は、全国各地で様々な世代の同窓生が御活躍されている話を伺いました。同門として誇らしく、頼もしい限りです。同じ部屋で学んだこの繋がりを今後も大切にし、また次回も、みんな「元気で集まれることを楽しみにしております！

（平成30年9月15日 於：鶴岡市「滝太郎」）

自然との調和を図る優れた技術！

業務内容
道路・橋梁・各種構造物調査設計／農業土木調査設計／農業集落排水／測量調査・地質解析／上下水道調査設計／河川・砂防調査設計／港湾・漁港・海岸調査設計／都市開発計画／環境アセスメント／施工管理／構造物維持管理（橋梁定量的診断ほか）

株式会社　帝国設計事務所
認証　ISO 9001

代表取締役会長　菅原 義昭（昭和40年 農工卒・技術士）
代表取締役社長　磯部 勝彦（昭和52年 農工卒・技術士）
技 師　前山 俊隆（平成22年 生産卒）

〒065-0025 札幌市東区北25条東12丁目1番12号 帝国ビル
TEL 011-753-4768　FAX 011-753-0488 URL http://www.kk-teikoku.jp

在学生の声

「ぐるぐる」

平倉 智弘
（農学研究科生物生産学専攻1年）

物心ついた頃から、勉強が嫌いだった。もう悶え苦しむほどに嫌い。高校時代数学の宿題があって、問題集を10ページぐらいする宿題だったと思うが、一日中やって2ページも終わらなかった記憶がある。とにかく分からないことが苦しくて、苦しさで頭が一杯になって更に分からなくなって、それでやりたくなくなって、でもやらないと宿題終わらないし、分かんないままだし、みたいなことがぐるぐる頭の中を回っていた。

今になってよく考えてみるとただ単純についていけてないだけなんだと思う。

高校にはついていけてなかったが、大学に入ったら変わりました、とか新しい活動を始めました、とかそうなればいいとは思ったが、そんなことはなく、やっぱりテストとか、締切とか、いろいろ追われていた。

研究室に配属されるとさらに状況は悪化した。今まで楽だったんだなと感じた。求められることが変わったからだと思う。頭の中は混乱を極め、壊れかけのハードディスクのような音が聞こえた。自分が今なにをやっているのか、これから何をしたら良いのか、我々はどこから来たのか、我々は何者か、我々はどこへ行くのかさっぱり分からなくなった。能力の低さを痛感し、自分がかなり恵まれた環境にあるにもかかわらず1日1日とできることを自分の手で潰していっているような、そんな苦しさがあった。

ただ、苦しいままでは終われないと思っている。分からないことを分かりたいと思う。追われる側から追う側になりたい、つまり最低限やらなければいけないことでいっぱいいっぱいになるのではなく、それ以上の、やるべきこと以上のことをしたい。今はそう思っている。

ものの見方、というのは人により、体調により、時期により、環境により変わる。なんなら事実以外のすべてのことは変わる、と思っている。そういえば、つらい経験のことをいい経験だったと話す人がいた。もしそうならそのうちここでの経験もいい経験に変わるかもしれない。そう信じて、もう少し食らいついていこうと思う。

なんだかんだ言って充実しています、ということです。ありがとうございました。おわり。

「大学での日々」

千明 賢吾
（食料生命環境学科
食品・応用生命科学コース4年）

大学生になって3年半、鶴岡キャンパスで学び始めてから2年半が経ちました。大学に入学したての頃は、4年間はとても長いものだと想像していました。しかし今となってみると卒業までであと半年しかなくなり時間の流れる早さを実感しています。

高校生の頃、ただ漠然と生命系の大学に行きたいと思い山形大学農学部を受験しました。そして2年生になるときのコース決めでは特にこれがやりたいということもなく一番興味の持てそうな食品応用生命科学コースを選びました。そんな感じで高い志もなく過ごしていましたが専門的な授業を聞いているうちに食品の機能や生物の細胞の中での生命現象などに面白さを感じるようになりました。特に微生物に関することに興味を持ち、現在所属している応用微生物学研究室に入ることを決めました。

研究室に入ってから半年は研究に必要となる基礎的な実験を先輩から教えてもらいました。最初は何もわからず、実験を進めていくときに戸惑うことが多かったのですが、徐々に実験に慣れていきました。4年生になり本格的に卒業論文の研究になるとただ単に実験をするのではなく結果にこだわるようになりました。失敗することもあり大変な実験もあるのですがやはり結果が出るとうれしく、その先の実験を頑張ろうという気持ちになります。

また、研究室では実験だけではなくさまざまな行事があります。忘年会や花見、隣の研究室との合同で山菜取りにも行きました。こういった行事は研究室に入っているからこそできることなので、毎日研究を頑張っている研究室のメンバーとたまにある行事を楽しむことはとても良い息抜きになります。これからある行事の中で私が最も楽しみにしているのは研究室対抗のバレーボール大会です。私の研究室は一昨年、昨年と優勝しています。昨年は先輩たちとともに試合をし、優勝できたのでとても楽しかった思い出があります。今年も優勝を目指して頑張りたいと思っています。

研究室での日々は大学生活の中で自分にとって最も大切な時間だと思っているので、その時間を無駄にせず過ごしていきたいと思います。

「森林環境教育について考える」

今 さやか
（食料生命環境学科
森林科学コース4年）

気が付けば4年生も半ばで、半年後には卒業という時期に差し掛かっています。私は3年生の頃から森林影響学分野に興味を持ち、人と森林との関わりについて研究しようと思いました。よく耳にする「里山」は人間が生活を営むために昔から手を加えてきた場所であり、里山の近くで生活するためには今後も継続的な維持管理が不可欠です。里山を手入れしていくためには地域住民の里山という環境への理解と手入れへの参加意識が必要だと考え、これに関する卒業研究に取り組んでいます。3年生の後期からは地域の森林ボランティア活動にも参加させてもらい、わずかですが森林環境教育に携わってきました。

ある活動では里山の近くの小学生の皆さんを迎え、里山と生活との関わりを一緒に学びました。里山の利用や生活の中の燃料の変化などの講話を聞きつつ里山を散策しました。途中、落ちている枝葉を集め、時には大きな枝はノコギリを使って薪にし、それを燃料に炊き出しを行いました。味噌汁の具材は里山整備団体が手掛けている畑から収穫し、子どもたち自ら火おこしするところからスタートしました。お腹いっぱいになった後は、木質ペレットを燃料とするペレットボイラーを使った温泉施設で汗を流しました。初めは足もとに転がる枝葉が燃料になることに実感がなかった子どもたちでしたが、実際に炊き出しをしたりペレットボイラーを見学して「枝葉＝燃料」という認識が生まれたようでした。また、火を扱うことにおっかなびっくりである反面、楽しむ様子も見られました。「里山からの資源を使う場面」に触れることも里山への理解を深める要因になるのではないかと思います。

またある時は中学生の皆さんとともに竹林整備をしました。みんなでヘルメットとノコギリを装備し、竹を切り倒し、枝打ちや切り分けして運び出しました。この活動では竹林整備の必要性をお話しする機会を頂き、昔は竹ぼうきやザル、農業漁業で使われる籠に利用されていた竹が、近年プラスチックの登場によって利用が減ってしまったこと、タケノコの輸入が増え、国内生産量が減ったことなどをお話ししました。分かりやすく伝えるのは難しかったのですが、ザルの原料を例としてお話したとき、中学生のみなさんがハッと気付いた表情は忘れられません。

卒論としてまとめるまでには残りわずかな時間ですが、多くの人に里山の手入れに関心を持ってもらうこと、そのためには何が必要なのかを考え、次世代の里山整備を担う世代へ伝えること、興味を持ってもらうことについて考えていきたいと思います。

留学生の声

Shine-Undarga DAGVA 農学研究科 1年（長谷研究室）

New chapter of my life: Japan

My name is Shine-Undarga DAGVA and I am Mongolian. Mongolia is a landlocked country between China and Russia. Mongolia is cold in winter reaching an average of -29℃ at night in January and summer is dry with an average high of +24℃ during the day in July.

I came to Japan in April, 2018 to study for my master degree in Plant Pathology under my supervisor, Hase Sensei. I regard coming and studying in Japan as a new challenge and a new beginning in my life. My name Shine Undarga means New Beginning in the Mongolian language, so my whole life will be full of new beginnings, I guess. Actually my life has already had so many different chapters.

My single biggest chapter so far was spending 5 years in Turkey. I completed my undergraduate degree in Turkey two years ago. Even though I went there when I was very young, only 16 years old, it was fun because I had my Mongolian friends with me and also I made new friends with Turkish people. In contrast, coming to Japan was my first time coming to foreign country alone and also without a scholarship. So it would be a lie if I said everything was completely perfect and I was always happy. There were sad days and happy days from April 2018 till now. I believe that because there were sad days that I could become strong and could make a bond with Japanese people.

Before coming to Tsuruoka, I went to my Mongolian friend's graduation ceremony in Tochigi prefecture. When I went to a flower shop to buy her some flowers, after hearing it's my first time here, the florist told me "Oh, your first time here? It will be okay. Because Japanese people are kind." And she was right. I got so much help from people around me: my supervisor, my international student supervisor, Lopez sensei, my laboratory members, my Japanese teachers and also my international friends.

When I studied in Turkey, my Turkish was fluent enough to have conversations and to receive lectures, so even though I was a foreigner, in my heart I didn't feel I was any different from the local Turkish people. So when I first came here, I felt totally powerless due to my lack of Japanese. It is hard to remember the last time that I felt as powerless as this. So now I am working hard to learn Japanese. 'How?' you ask.

I would like to tell you a short story about my Japanese teacher. I met her when I first came to Tsuruoka. My friend in Tochigi prefecture graduated from Haguro high school. She became so close to her Japanese teacher that she started calling her "Mother". So I too am too calling her "Mother" now. My friend introduced me to her and asked her to look after me. The second time I met her, she asked me if I need anything. That was when I was feeling hopeless with my lack of Japanese. So I told her, "Please teach me Japanese." That's when we started this Japanese class every Saturday.

One typical Saturday, after doing some Japanese exercise, mother and I were talking about work and family. I asked her if Japanese people thinks their work is more important than their family and if that is sad. She answered me "Even though family is important, work is as important as family, because earning money is what keeps the family stable." Then she shared her story with me.

… My children, when there were very young, always complained about my husband coming home late. "Why is father always late? He doesn't care about us at all."… They would complain. I would defend him, saying "Your father is working so hard to keep us safe. So you shouldn't say that.". I was also working long hours those days and someday I would be late and my children were so hungry when I got home. They would get angry with me saying "Mother, Where have you been? We are very hungry!" But my husband would defend me saying "You shouldn't get angry with your mother. She is working very hard. If you have time to complain to her, just help her with the cooking instead!"…

After hearing that story I finally realised how naive I was, I could see the importance of earning money and also the importance of having a good partner in life. There were two things in this story that impressed me. Firstly, I know she loved her children and yet she still worked long hours to earn money to support them, knowing her hungry children would have to wait for their meal. Secondly, how she and her husband defended each other, and didn't argue. I don't know if it was Japanese culture or just their lifestyle. But I like to learn small yet precious things when meeting new people. They say talking is one of the ways of experiencing an adventure. That's why I love my life of new beginnings so much.

If I write here about everyone who has helped me, I have to write a whole new book. So I am finishing my story here. But please know that I appreciate everyone's help from all my heart. Thank you.